

エリート御曹司は傷心の彼女に
溢れる深愛を甘く刻み込む

プロローグ

『別れてくれ』

付き合っていた彼氏にそう告げられ、言葉を失った。
あまりにも突然の出来事になにが起きているのか理解できずにいると、彼はさらに衝撃的なことを言った。

『他に好きな人ができたんだ。茅乃ちゃん^{かよ}は、俺が守ってあげないといけないから』

茅乃ちゃんというのは、私の妹だ。まさか、妹に彼氏を奪われるとは思ってもみなかった。それと同時に、またか……という諦めにも似た思いが、胸の中に広がる。

私に告白してくれた彼の『好き』という言葉を感じていたのに。こんなにもあっさりと裏切られるなんて、考えもしなかった。

振られたショックより裏切られたことの方が、ダメージが大きかった。

付き合い始めてまだ一ヶ月にも満たないのに、こんな結末を迎えることになるなんて誰が予想しただろう。

彼の変わりように、人の心はこんなにも脆い^{もろ}のかと深く絶望する。この時のことは私の中にトラ

ウマになった。

けれど――

そんな私の心を救ってくれた人がいた。嘘のない瞳で、真っ直ぐに私を見つめてくれる誠実な人。
「志乃」

甘く優しい声で名前を呼ばれ、彼の、政宗まつむねさんの唇がそっと私の唇に触れた。

「誰よりも大事にする」

政宗さんの真摯な瞳が迷いなく私をとらえ、傷ついた心には言葉が優しく降り注ぐ。

人を信じるのが怖かった私を、彼は少しずつ癒してくれた。

政宗さんの指先が私の頬に触れる。優しく微笑むその表情を見るだけで、胸の奥がキュウと締め付けられる。

彼が顔を近づけ、再び唇が重なる。

最初の触れるだけのキスとは違い、今度は舌が唇を割って侵入してくる。ぬるりとした感触に体がゾクリと震える。口内が政宗さんの熱で満たされ、深くて長いキスが続く。

「んっ、ふっ……ん」

自分の声とは思えないほどの甘ったるい吐息が漏れ、羞恥しゆうちで顔が赤く染まる。

政宗さんの舌は縦横無尽に動きながらもどこか優しく、私の反応を探っているようだった。

唾液が絡まり合う音や、お互いの乱れた吐息が静かな部屋に響く。

政宗さんの大きな手が私の腰に回り引き寄せられると、体温が一気に上昇して心臓が激しく脈

打つ。

緊張で強張っていた体が、彼の優しく丁寧な愛撫あいぶによって少しずつほぐされていく。

そして破瓜はかの痛みでさえも、政宗さんの愛が包み込んでくれる。

好きな人と心も体も繋がれたことに、言葉にならないほどの喜びを感じる。

蕩とろけるような甘い感覚が全身を駆け巡り、私は自然と身を委ゆたねていた。

第一章 気になる人

金曜日の夜、仕事終わり。私は会社近くの居酒屋『まちらく』に同期の遠藤博美と来ていた。

この居酒屋はサラリーマンやOLが多く、リーズナブルで料理がすごく美味しいので、普段からよく利用している。お洒落なお店やバーに行くより、こういう居酒屋の方が気軽に話ができる気がする。掘りごたつ式の座敷席に案内され、腰を下ろした瞬間に博美が口火を切った。

「今日もまた怒られたんだけど」

博美は大きな黒い瞳に目尻がややつり気味の猫目で、黙っていればクールビューティーだが、実際のところは全然そうではない。お喋り好きで、話に夢中になると手が止まってしまうことが多い。あり、上司によく怒られているらしい。今も不貞腐れたように愚痴をこぼしている。

私たちの勤務先は文具メーカーの『ラビット』。文具、事務用品などの開発、製造、販売などを手掛けていて、自社ブランドも展開している。

海外向けにも力を入れていて、着実に実績を伸ばしている会社だ。

オフィスビルと併設する形で倉庫を持つこともあり、広い敷地を有している。そのため、仕事場は駅から少し離れた場所にある。車通勤の人が多く、私は駅から徒歩、雨の時はバスを利用

している。

私、木下志乃は物流部で勤務している。二重の少したれ気味の目、唇が薄いのが悩んでメイクでどうにか誤魔化している。とはいっても基本はナチュラルメイクで、仕事の時はピンクブラウンの髪の毛をひとつにまとめている。

仕事内容は受注受付やデータ入力などの事務作業、納品書や伝票の作成などのデスクワーク。

たまに商品のピッキング作業を行うこともある。さすがにフォークリフトに乗ったり力仕事をしたりするということはない。商品の入荷、保管、出荷を円滑に行わないといけないので、大変けどやりがいのある仕事だ。

今、愚痴を言っている博美とは内定者懇親会の時に初めて話し、そこから仲良くなった。

「ちよつと後輩と話をしていただけで『無駄口をたたくのは止めて、手を動かして』って言うてく
るの。仕事中でも息抜きは必要だと思わない？　うちの課長、ホント融通が利かない堅物なんだよ
なあ」

博美は経理部勤務で、私はその上司の愚痴をよく聞かされている。

その上司が経理課長の小笠原政宗さん。年齢は三十一歳だったはず。年齢の割に落ち着いた雰囲気
で、端正な顔立ちをしている。

「息抜きね……。博美が息抜きの度を越して、喋ってばかりだったんじゃないの？　その姿が目
浮かぶけど」

「失礼な！　確かに、話が盛り上がって手は止まっていたけど」

博美はそう言っただけを膨らませる。ちゃんと自覚はしているようだ。

「ホラ、それだと注意されるのは当然でしょ」

「志乃までそんなこと言わないでよ。少しは私の味方になってくれないんじゃない？」

こちらにジト目を向けながらも、博美はまだ話を続ける。

「あの課長、絶対に彼女とかいえないと思う。愛嬌の欠片かけらもないし、普段は口数が少なくせに喋ったと思ったら『無駄口を叩くな』だよ。私にとっては無駄口じゃないのに！」

博美がイライラした様子でビールを飲み干す。

「あの人は本当にウマが合わない。真面目で仕事もできてイケメンかもしれないけど、あれはないわ」

微妙に褒めているようにも聞こえるけど、さつきから小笠原課長の愚痴が止まらない。

博美は失礼なことを言っている自覚はあるんだろうか。自分のことは棚にあげて好き放題に言い続ける。あまりにも聞くに耐えないので、つい口を挟んでしまった。

「そうは言っても、課長に助けられている部分はたくさんあるでしょ？」

「まあね。仕分けてミスした時、それを指摘してくれたおかげで事なきを得たこともあるからね」

「ほら、悪いところばかりじゃないじゃん」

博美は肩を竦すくめた。

「仕事についてはぐうの音も出ないわ。課長、月末の締め日なんてずっと動いているからね」
頬杖を突き、信じられないというような表情を浮かべて話す。

「売掛金の回収状況、支払予定、資金繰り表とかチェックして、部長に報告している姿をよく見るし。決算処理なんて誰よりも早くて正確だし、資料の精度は常に完璧。これはマジですごくいいと思う」

博美の言葉で、課長の能力がどれだけ高いのかわかることができる。

やっぱり、真面目に仕事をする人は素敵だなと思う。

ふと、テーブルの上の美味しそうな料理に目をやった。今日は飲み放題付きの女子会コースで予約しているので、頃合いを見計らって次々と料理が運ばれてくる。

博美は喋ることに夢中になり、食事をする手を止めていた。

それが楽しい話ならまだしも、愚痴を延々と聞かされると、こちらもうんざりするし飽きてきた。さつきから、じゃがバターの明太子載せの美味しそうな匂いが鼻をくすぐってくる。

「ねえ、仕事関係の話はそのぐらいにして食べようよ」

「そうだね。すみませーん、ビールのお代わりください」

博美は喋りっぱなしで喉が渴いたのか、素直に納得して食事を再開する。

お酒が進みほどよく顔が赤くなってきた博美は、話題を恋愛話にシフトチェンジした。

「あー、彼氏が欲しいな」

「またそれ？」

「だって、最近全然出会いがないんだもん」

そう言っただけで博美はふくれっ面になる。彼女はモテるけど、男性と付き合っても長続きしない。なにが原因なのか、私にはさっぱり分からないけど。

「そういえばこの前、合コンするって言ってなかった？」

「あー、なんか相手の人数が集まらなかったみたいで、合コン自体なくなったんだよね」

博美が残念そうに大きいため息をつく。積極的に出会いを求めるバイタリティーはすごいと思う。

「志乃は彼氏欲しいとは思わないの？」

「うん」

「えー、なんで？ そんなに可愛いものもつたないじゃん。前から思っていたんだけど、志乃って全然男の人の話とかしないよね。一体、どんな人がタイプなの？」

恋愛関係の話はあまりしなくなかったので、返答に困る。

大学生の時に初めて付き合った人と別れて以来、彼氏はいない。そしてその彼と別れた原因が、私の心に暗い影を落とす。それに私は現状に満足していて、博美みたいに彼氏が欲しいと思う気持ちがそこまでない。多くは望まないけど、私のことを一途に思ってくれる人と付き合えたらいいなと考える程度だ。

自分のタイプがどんな人かなんてあまり考えたことはなかったけど、ふとある人の顔が頭に浮かぶ。少し悩み、その人のことを想像しながら答えた。

「私は真面目で誠実な人がいいかな」

「なにそのお手本みたいな答え。顔がイケメンの御曹司がいいとかないわけ？ もっと欲を出せばいいのに」

そう言って不服そうに頬を膨らます。そんな顔をされても困るんだけど。

欲か……。博美の言うことは分かるけど、私は嘘をついたり人を簡単に裏切ったりしない誠実な人がいい。この考えは、人付き合いにおいて男女ともに共通していることだ。

そんな風に考えるようになったのは、私が幼少期から経験してきた出来事が関係している。

欲しいものを手に入れても簡単に奪われてしまう。だったら、最初からなにも望まない方がいいと考えるようになった。自分の欲望のまま『欲しい』と言える人が羨ましい。

年齢を重ねるにつれ、諦めてばかりじゃいけないとも思うようになった。でも、また奪われるかもしれないという不安が常に付きまとってくる。

いい加減このトラウマから解放され、強い自分に生まれ変わりたいというのが本音だ。

「まあ、でも真面目な志乃らしい答えだね。イケメン大好き、とか玉の輿に乗りたいたか言い出したらマジで怖いわ」

そこまで清廉潔白ではないと思うけど、博美の中の私のイメージって一体どうなっているんだろう。気になるところだ。

そう思っていると、急に博美がドンとテーブルを両手で叩いた。

「あー、彼氏が欲しい。出会いが欲しいー！」

酔いが回っているのか、大きな声で叫ぶ博美を宥める。

「ちよっと、声が大きだよ。静かにしなよ」

酔って居酒屋で騒ぐなんて恥ずかしくない。博美は黙っていれば美人なのに、もったいない。

「すみません、ビールのお代わりください」

店員に声をかけ、何杯目か分からないお酒の注文をする博美に思わず苦笑いした。

週が明けた月曜日。

出社前にフレッシュジュース専門店の『フレッシュスター』で買ったミックスジュースを飲みながら、パソコンを起動させる。

パスワードを打ち込んでいると、後ろから声をかけられた。

「おはよう」

「おはようございます」

事務所に入ってきた、先輩の比嘉^{ひが}智美^{ともみ}さんが私の隣の席に荷物を置く。

智美さんは私より六歳年上の既婚者で、今年三歳になったばかりの男の子のママだ。

ふんわりとした茶髪のボブ、パツチリとした二重が印象深い美人さん。仕事と子育てを両立して、私が尊敬する人。

「今日の入庫出荷予定のリスト確認した？」

「すみません、まだです」

「了解。ごめんね、志乃ちゃん出社したばかりだったのね」

智美さんは私のパソコン画面を見て察してくれる。彼女は周りのことをよく見ていて、その気遣いにいつも助けられている。

「あつ、志乃ちゃんは今日ミックスか。私はバナナにしたの。我慢できなくてちよつと飲んじゃつ

たけど」

そう言つて、智美さんは半分以上なくなっているジュースのカップを持ち上げる。私も智美さんも『フレッシュスター』のジュースがお気に入りだ。

「バナナも美味しいですよね」

「ミックスジュースと迷ったけどね」

「分かります。私もいつもどれにしようか迷っちゃいます」

種類が豊富だし、季節限定メニューがあれば絶対に一度は飲むことにしていて、気に入ったらそればかり飲んでしまう。そこでふとあることを思い出した。

「そういえば、今週の土曜日でいいんですよね？」

「あ、うん。でも、本当にいいの？」

智美さんが確認するように聞いてくるので、私は頷いて笑顔で答えた。

「もちろんです。啓^{けい}介^{すけ}くん可愛いですし」

「助かるわ。ありがとう、志乃ちゃん」

「んでもないです。智美さんにはお世話になっていますから」

今週の土曜日は智美さんの結婚記念日。以前「息子がまだ小さいから子育てを優先していて、ちゃんと記念日のお祝いをしていない」と話していた。比嘉夫妻のご両親は遠方に住んでいて『ちよつと出掛けるから預かって』と気軽に頼むことができないとも言っていた。

そのことを思い出し、お節介かなと思ったけど「啓介くんを預かるので二人でお祝いしてください

い』と提案してみたのだ。

智美さんの息子の啓介くんとは何度も会っていて、嫌われないと思うのできつと仲良く遊べるはず。智美さんも最初は『申し訳ない』と遠慮していたけど、今回ばかりは、と強引に押してみると『ありがとう』と言って少し照れながら頷いてくれた。

「本当に夕方までいいんですか？　夜まで預かりますけど」

「うん、大丈夫。あまり遅くなつて啓介が駄々をこねだしたら面倒だからね。せっかくだから、二人きりのデートを楽しませてもらうわ」

嬉しそうに話す智美さんは、いまだに旦那さんとラブラブだというのがうかがえる。

「さて、仕事しましょうか」

智美さんの言葉に「はい」と返事し、まずはメールの確認から始めることにした。

それが終わると、さっき智美さんから渡された伝票をクリアファイルに入れた。

「伝票、経理部を持って行ってきます」

ファイルを手にしち上がり、智美さんに声をかける。彼女は、電話の受話器を持ち上げながら「お願いね」と口パクで言った。

いつも、作成した伝票や書類などを経理部に持つていくのは智美さんがやっている。

でも今日は一部の商品の納入遅延があり、智美さんはその後処理に追われているので私が代わりに持つていくように頼まれたのだ。

事務所を出て、本社のオフィスビルまでの道のりを歩く。私がいつもいる場所は、物流倉庫内の

事務所。

本社ビルと同じ敷地に物流倉庫があり『ラブイット』の全種類の商品の在庫を保管している。

我が社の商品アイテムは何千種類とあるため、さすがにこの倉庫だけで大量に保管するには限界がある。だから各地に物流センターがあり、そこから安定して商品を供給できるようになっている。今は九月。広大な敷地には手入れされた花壇もあり、四季折々の花が楽しめる。

ピンクや白、オレンジのコスモスが風に揺られていて、それを見ているだけで癒される。

本社に入り、エレベーターに乗って二階のボタンを押す。ポーンという音が鳴り扉が開いたので、エレベーターを降りて経理部に向かった。

「失礼します」

「あれ、志乃じゃん。どうしたの？」

声をかけて経理部のフロアに入ると、私に気づいた博美が呑気に席を立てて近寄ってくる。

フロアに入る前から、博美が隣に座っている人と大笑いしながら話しているのが見えた。

以前、上司から注意されると愚痴っていたけど、そういう振る舞いをしているので当然だと思う。自分の言動が原因だと理解すれば注意も減るはずだけど、私がなにか言ったところで博美は変わらないだろう。

「伝票を持ってきたの。比嘉部長は……」

そう言っただけで周りを見回す。

「今、ちょっと席を外しているわよ」

「そっか。じゃあ、小笠原課長に渡しておこうかな」

「課長ならあそこにいるよ。険しい顔してパソコン入力しているでしょ」

小笠原課長を顎でしゃくり、私の耳元で囁いた。私は思わず眉間にシワを寄せる。見られていないからといって、上司を顎でしゃくるなんて驚きだ。

課長と性格が合わないと言ってみたり愚痴を言ったり、こういうことをしなければ博美はいい子なのに。

「ありがとう。あと、口ばかり動かすんじゃないくて、真面目に仕事しなよ」

私は博美の肩をポンと叩き、課長の席に向かった。

「お疲れさまです。物流部の比嘉に頼まれた伝票を持ってきました。部長がいらっしゃらないみたいなので受け取ってもらえますか？」

私が声をかけると、課長はキーボードを叩いていた手を止め、顔を上げた。キリッとした切れ長の目が私をとらえ、思わずドキッとする。艶やかな黒髪を後ろに撫でつけ、シャープな輪郭と鼻筋の通った端正な顔立ち、クールで洗練された大人の男性といったところだ。

背も高く、学生時代はなにかスポーツをしていたのではと思うような体つき。

私の中では、課長は控えめでありながらも、確かな存在感を放つ人だった。

他の会社は知らないけど、うちの会社にはイケメンが多い気がしていて、その中でも特に目立つ人が二人いる。

一人は営業部の立花翔真さん、社長の息子で次期社長になる人。もう一人は商品企画部の高柳

千尋さんだ。数えるぐらいしか見かけたことはないけど、この二人は立っているだけで目を引くような、華があるというかイケメンのオーラが漂っている感じがする。彼らを太陽のような存在とするなら、小笠原課長は月のような人かもしれない。派手さはないけど塩顔イケメンで、静かに光を放つような魅力があると思う。隠れファンがいるという噂話を聞いたことがあるけど、直属の部下の博美は小笠原課長にいい印象を抱いていない。

「ああ、木下さん。ありがとう」

そう言っただけで課長は私の名前を呼んでくれた。頻繁に接することのない私の名前を覚えていてくれたのかと嬉しくなる。

入社して数ヶ月経った頃、すでに博美から愚痴をよく聞かされていた。その中で『堅物で真面目で仕事ができるけど、口うるさい小笠原課長』の話は何度も出ていて、その度に課長がどんな人なのか気になった。しばらくして、社内イベントで初めて小笠原課長に会う機会に恵まれた。実際に話してみると、言葉遣いが丁寧で私の想像していた人物像より遥かに優しく、柔らかな雰囲気の人だった。その時から、小笠原課長のことが興味を持つている対象から気になる存在へと変化していった。

小笠原課長に会える機会は少なかったけど、偶然彼の姿を目にするだけで胸が高鳴り嬉しかった。その気持ちがなんなのか分からないわけではない。だからといって、答えを出したところでどうこうしようとは思わない。遠くから見ているだけで十分だ。

今日も、智美さんに経理部に伝票を持って行くように頼まれて、内心すごく嬉しかった。

課長が仕事をしているところを見られるかな、なんて邪なことを考えてしまったのはここだけの話。そして比嘉部長が席を外していたので、幸運にも課長と話ができた。

博美は愚痴ばかり言っているけど、同じ部署で顔を見て話もできるなんて羨ましい限りだ。

「よろしくお願いします」

手に持っていた伝票の入っているファイルを渡して、頭を下げる。そのまま踵を返そうとした瞬間、女性社員が近寄ってきた。

「小笠原課長、今いいですか？」

さっきまで博美と話をしていた女性だ。書類を手に課長と話しているけど、なんとなく二人の距離が近いような気がする。同じ部署だからそう見えただけなんだろうか。でも、課長と話している時の上目遣いで見上げる仕草に胸がモヤモヤする。

さっきは遠くから見ているだけで十分だと思っていたくせに……

自分でもよく分からない感情が胸をかすめ、慌ててその考えを振り払った。早くこの場から去ろうと歩きながら博美の方を見ると、ちょうど電話を終えたところみたいで受話器を置いていた。

私と目が合うと、笑顔で手をヒラヒラと振ってくる。

課長と同じ部署で羨ましいという本音は胸に秘め、真面目に仕事をしなさいよという視線を送り、私は経理部のフロアを出た。

午後からは出荷準備を手伝うことになったので、倉庫内を行ったり来たりしていた。顧客から注

文を受けた商品を梱包し、指定の場所に配送する。たまに本社の人に頼まれた商品を梱包して、直接手渡しすることもある。出荷指示書をもとに、不良品がないか検品した商品と納品書を梱包する。最初は商品の場所を覚えるのに苦労し、時間もかなりかかっていた。倉庫担当の人に『遅い』と何度か注意されたことがあり、必死に覚える努力をした。場所さえ覚えてしまえば、前は二時間かかっていた作業も半分の時間でできるようになっていた。

すべての作業を終え、事務所に戻る。今日はピッキングが終われば、そのまま退社してもいいと部長に言われている。久しぶりの倉庫での仕事だったので、体はいつもより疲れていた。

「お疲れさまでした」

まだ残っている同僚に声をかけ、バッグを手に事務所を出る。

敷地を歩いていると、本社から出てきた人の中に見知った顔を見つけ、私は小走りで駆け寄った。
「梨音ちゃん！」

「あつ、志乃ちゃん。お疲れさま」

ふわりと柔らかな笑みを浮かべるのは、河野梨音ちゃん。私より一歳年上、商品企画部で働いている。モカブラウンの髪の毛が肩で揺れ、パッチリ二重が印象的な綺麗な人。私と梨音ちゃんは、中学の時から一緒にピアノ教室に通っていた。学校は違ったけど、レッスンは前後の時間帯で何度か話すうちに仲良くなり、私は優しいお姉ちゃんができたみたいで嬉しかった。

私が中三の時にピアノ教室を辞めてから、自然と関わりはなくなっていたけど、同じ会社でまさかの再会を果たして本当に驚いた。しかもその再会の仕方が特殊で、ドラマのような出来事だった。

うちの会社は二ヶ月に一度、シャッフルランチという社内イベントを実施している。それは、他部署の社員とご飯を食べながらコミュニケーションをとる、というもので参加者はランダムに選ばれる。私は入社一年目の秋に選ばれてしまった。

長年勤務していてもまだシャッフルランチに選ばれたことのない人もいる中、まさかこんなに早く自分が選ばれるなんて夢にも思わなかった。でも私にとって、これが運命の出会いにも繋がったのだ。

その時のメンバーは人事部、経理部、海外事業部、企画部、営業部、物流部から選ばれた性別も年齢もバラバラの六人。そんな中、企画部からは梨音ちゃんに参加していた。このシャッフルランチがなければ、梨音ちゃんと同じ会社で働いていることに気がつかなかっただろう。偶然の再会に梨音ちゃんと二人で喜んだ。それから連絡先を交換し、一緒に食事に行くなど交流が続いている。「お疲れさま。仕事終わりに一緒になるの久しぶりだよね」

「そう言われるとそうかも」

梨音ちゃんと並んで、駅までの道のりを他愛もない話をしながら歩く。私は倉庫、梨音ちゃんは本社で働いているのでなかなか会えない。たまに、梨音ちゃんが倉庫まで商品を取りに来ることがあるけど、そういう時にかぎって私が席を外していたりする。

「そういうえば、梨音ちゃんに教えてもらったジュース屋さん。私もすごいお気に入りになって、よく買っているんだよね」

梨音ちゃんから教えてもらった『フレッシュスター』は開店時間が八時なので、出社前に買える

ので本当にありがたい。

「美味しいでしょ。私は毎週金曜日に買っているんだ」

「買う曜日、決めているんだね。私、週三は行ってるかも」

「それは多くない？」

そんなことを話していると、あつという間に駅に着いた。

「じゃ、私はあつちだからまたね」

「うん。お疲れさま。またね」

手を振り、笑顔で別れる。ふと腕時計を確認すると、電車の出発時間が二分後だと気づいて、急いで改札口へ向かった。

第二章 近づく距離

約束の土曜日、電車と徒歩で智美さんのマンションに向かった。玄関のドアが開き、智美さんが笑顔で迎えてくれる。彼女は、オフホワイトのブラウスにカーディガンを羽織り、下はネイビーのフレアスカートをはいている。

「どうぞ、あがつて」

「お邪魔します」

靴が何足も並べられている玄関に足を一步踏み入れると、隅には啓介くんの外で遊ぶ時のものであろうオモチャが置いてある。脱いだ靴を揃え、用意してくれたスリッパを履いた。

「しのちゃん」

私の名前を呼び、笑顔で駆け寄ってきたのは啓介くん。柔らかな栗色の髪の毛にクリクリな大きな目、ぷっくりしたほっぺは本当に可愛くて天使みたいだ。

「こんにちは、啓介くん。今日は一緒に遊ぼうね」

しゃがんで啓介くんと目線を合わせる。

「うん。ぼく、すべりだいやりたい」

「そうだね、やろうね」

「志乃ちゃん、今日はありがとう」

啓介くんと話をしていると、廊下の奥から旦那さんの比嘉大介部長が歩いてきた。部長は彫りの深い顔つきでがっしりとした体格なので、ちよつと失礼かもしれないけど、動物に例えるなら熊というのがピッタリだ。そのせいで、社内の人から美女と野獣の夫婦と言われている。

啓介くんは間違いないく智美さん似で、将来は絶対にモテると思う。ちなみに、部長と智美さんは一回り年齢が離れていて、智美さんが積極的にアプローチして恋を实らせたと聞いている。

優しくて頼りがいのある比嘉部長、綺麗で気配りのできる智美さん。二人はいいバランスで似合いの夫婦だ。

「とてもないです。今日はゆっくり楽しんでくださいね」

私は笑顔で答えた。

「啓介。靴下を穿いて、パパと出かける準備をしよう」

「はい」

啓介くんは元気に返事をして、比嘉部長の後を追いかける。その姿が可愛くて思わず頬が緩む。

「あの、今日は公園で遊んでお弁当を食べたあとはどうしましょうか？ 長時間、外にいるのも啓介くんが疲れますよね？」

運転免許は持っているけど、車は持っていない。移動手段のことが頭からすっかり抜け落ちていた。「それだったら大丈夫。助っ人がもう一人いるから」

「助っ人ですか？」

「そうなの。最初は志乃ちゃんだけをお願いするつもりだったけど、啓介の相手はかなり疲れれると思うのね。それに足があった方がいいって大ちゃんが言うから、車を持っている人に来てもらうことになったの」

廊下を歩き、リビングに向かいながら智美さんが言う。

車があるのは助かるけど、見ず知らずの人と一緒に過ごすのは私にとつてかなりハードルが高い。「そうだったんですね。それで助っ人は誰なんですか？ 私の知っている人ですかね？」

誰か気になっておずおずと尋ねた時、ピンポンとインターホンが鳴った。

比嘉部長が出て「鍵は開いているから入ってきて」とモニター越しに告げる。

ふと、リビングを見ると隅の方にくつかの段ボールが置かれている。そういえば、啓介くんが大きくなり、部屋が手狭になったので近々引っ越す予定だと言っていた。比嘉家は今、新築を建設中らしい。

玄関のドアが開き「お邪魔します」という男性の声が耳に届いた。助っ人って男性なの？

「遅れてすみません」

どこかで聞いたことのある、耳触りのいいバリトンボイスの持ち主に意識が集中する。

誰なんだろうとドキドキしながら、廊下を歩いてくる男性に目を向けた。

黒の薄手のニットにデニム、足元はくるぶし丈のソックス。髪の毛は無造作に下ろしていて、切れ長の目が印象的な男性だった。

この顔はもしかして……と、胸の鼓動がどんどん速くなっていく。

「政宗、今日は休みなのにすまないな」

「いえ、特になにもすることがなかったので構いませんよ」

比嘉部長の知り合いで、まさむね？

「小笠原さん、今日はよろしくお願いします」

智美さんはそう言っただけで頭を下げる。二人の言った名前を繋げると、彼のフルネームは小笠原政宗ということになる。

「え、小笠原課長……？」

ようやく顔と名前が一致し、まさかそんなことがあっていいのかと動揺して何度も瞬きをする。

「こんにちは、木下さん。今日はよろしく」

課長は特に驚いた様子もなく、私の名前を呼んだ。服装や髪形が仕事の時とは違ってラフだけど、間違いなく小笠原課長だ。予想外の展開にドキドキが止まらない。

それよりも気になったのが、私がいることに課長は全く驚いていなかったことだ。

彼の反応に、少しの違和感を覚える。もしかして、私と一緒に知っていたんだろうか。

私は助けを求めるように、智美さんを見た。

「志乃ちゃんも知っているとと思うけど、経理部の小笠原課長。大ちゃんが『政宗なら車も持っているし、俺が一番信頼しているやつだから安心して啓介と志乃ちゃんを任せられる』って言うからお願ひしちゃった。志乃ちゃんも小笠原さんと何度か話をしたことがあるみたいだし、ちょうどい

いかなと思って」

ふふ、と笑う智美さん。確かに話をしたことはあるけど、そういうことは前もって言ってほしかった。完全に事後報告だったので、心の準備ができていない。

「しのちゃん、いこ」

奥の部屋から、啓介くんが笑顔で歩いてきた。その頭にはクマの顔が付いたキャップをかぶっており、小さなリュックも背負っていてすごく可愛い。そんな啓介くんの視線が、課長をとらえた。

「まーくんだ!」

「啓介、大きくなったな」

「うん」

その場でしゃがみ、帽子の上から啓介くんの頭を撫でながら柔らかな笑顔で話す。

小笠原課長の見たこともない笑顔にドキッとする。こんな表情もするんだと、驚きを隠せない。

それに加えて、小笠原課長がまーくん……。その可愛らしい呼び方に、思わず顔がにやけた。

「それじゃあ、お預かりします」

「これ、食べ物とかおもちやが入っているから、適当に遊んでやって。なにかあったらすぐに連絡してくれていいから」

「分かりました」

課長が比嘉部長からトートバッグを受け取った。本当に今から課長と一緒に過ごすの？

さっきの笑顔といい、ラフな服装や髪型。普段と全然違うので緊張が半端ない。

課長とは必要最低限の仕事の話しかしたことがないけど、今日一日大丈夫かと不安になる。

これはもう、啓介くんに頼るしかない。

「パパ、ママ、いつてきまーす」

「行ってらっしゃい。まーくんと志乃ちゃんの言うことをちゃんと聞くのよ」

「はい。しのちゃん、おてつなご」

ニコニコしながら手を差し出す啓介くんの可愛さに、母性本能をこれでもかとくすぐられて悶える。

「今日はゆっくり過ごしてくださいね」

「ありがとう。お願いね」

私は啓介くんと手をつなぎ、エレベーターに乗り込んだ。操作盤の前に立ち、ボタンを押している課長を見る。彼には、先ほどの言葉通り比嘉部長の絶対的な信頼があるんだろう。

それにしても、会社とは全然違う見慣れない姿にソワソワする。私の視線に気づいたのか、こちらに顔を向けた課長と目が合った瞬間、ドキッと心臓が跳ねた。とっさに啓介くんの方を見る。

ちょうど、私を見上げた啓介くんが「たのしみだね」と笑いかけてくれたおかげで、少し気持ちが落ち着いた。

比嘉家のマンションから歩いてすぐの公園にやってきた。徒歩で五分もかからない距離にあり、気軽に立ち寄れる場所だ。公園はそれほど広い敷地というわけではないけれど、滑り台やブランコ、鉄棒や砂場などが揃っていて、子どもが遊ぶには十分な設備がある。芝生も綺麗に整えられていて、

レジャーシートを広げてくつろぐ家族連れの姿もチラホラ見かける。

今日は晴れているけど真夏のような強い日差しではないので、外で過ごすにはちょうどいい天気だ。

「しのちゃん、すべりだいいこう」

啓介くんがグイグイと私の手を引っ張り、公園の滑り台の方へ向かう。

「ちょっと待って、啓介くん」

三歳児のパワーにすでに圧倒され、焦りながらもついて行っただ。

「いっしょにすべろ」

「え、私？」

可愛く誘われたはいいものの、滑り台なんて十年以上滑ってないので不安しかない。すると、課長が私の肩にかかっていたバッグに手を伸ばした。

「木下さん、荷物を持っておくから行っておいで」

「ありがとうございます。あの、小笠原課長は滑らないんですか？」

「俺？ 指名されてないし、比嘉部長に啓介の写真を撮るように言われているんだ。だから、木下さんに任せるよ」

その口ぶりから、なんとなくだけど滑りたくないんだなとわかった。よく考えると、小笠原課長が滑り台を滑る姿なんて想像できない。

滑り台か……。こうなったら、明日以降の筋肉痛のことは考えず、とことん付き合おう。

公園に行くからと、今日はボードアのニットにデニムという動きやすい服装にした。もちろん足元はスニーカーだ。

啓介くんの手を引っ張られ、私は十数年ぶりに滑り台を滑ることになった。向かった先はローラー滑り台。あまり高さはなく、ローラーの部分が少し長いかなというぐらい。

さっきも小さい子どもが滑っていたから、三歳の啓介くんでもできそうだな。

啓介くんは小さな体で一步步、滑り台の階段を上る。私も、足を踏み外さないように気を配りながら後に続く。先に上った啓介くんが滑り台に座り、笑顔で振り返った。

「しのちゃん、ぼくじょうずにすべれるんだよ。みててね。おい、まーくん」

滑り台のゴール地点にいる課長に、啓介くんが手を振る。そして滑り台の手すりを持ち、ガラガラと音を鳴らして上手に滑っていく。滑り終わった啓介くんが、下から催促してきた。

「しのちゃん、はやく」

私も啓介くんがやったように、お尻をつけるように座ってローラーの上を滑り始めたけど、なぜか進みが悪い。途中で止まってしまったので、足でローラーを蹴りながらどうにか滑り終えた。

「しのちゃんもじょうずだね」

「あ……、ありがとう」

ローラーってあんなに振動してお尻に響くものだっただろうか。滑り台はこれで十分かも思っていたところに、悪魔の囁きが聞こえた。

「もういっかいやろう」

「えっ」

有無を言わず啓介くんの手を引かれ、私は再び滑り台を滑ることになってしまった。

「しのちゃん、たのしいね。もういつかいすべろ」

満面の笑みで言う啓介くんに、私は苦笑いしかできない。これで何回目だろう。

さっきから何度も滑ったので、お尻が痛くて楽しむどころではない。本音はもう勘弁してもらいたいけど、子ども相手に上手く断ることができない。また滑らないといけないのかと思うとため息が出てしまう。そんな私の心情を察知してくれたのか、課長が助け舟を出してくれた。

「啓介、滑り台は休憩して、そろそろ弁当を食べようか」

「えー」

「ママが作ってくれた弁当、俺が食べるぞ」

「それはだめ」

「じゃあ、弁当食べるか？」

「うん」

啓介くんの返事に私は胸を撫で下ろす。課長は意外にも子どもの扱いに慣れているようで心強い。彼のおかげで、無限ループ滑り台は終わりを告げた。

課長が芝生の上にレジャーシートを広げてくれている間に、私は啓介くんと一緒に手を洗いにいく。私たちが戻ってくると、交代するように課長が手洗い場に向かった。

レジャーシートの上には小さな弁当箱と水筒が置かれていた。これはもしかして啓介くんのお弁

当かなと思った瞬間、頭の中で「あれ？」と疑問符が浮かぶ。

不思議に思っていると、手を洗って戻ってきた課長が言う。

「比嘉部長から渡されたトートバッグの中に、啓介の弁当が入っていたんだ」

「そうなんですね」

私はそう答えながらも首を傾げる。私も啓介くんのお弁当を作ってるんだけど……

啓介くんは小さな手を合わせ「いただきます」と言い、フォークでウインナーを刺して口の中に入れる。

その様子を見ながら、私も自分のバッグからお弁当を取り出す。ひとつは啓介くん仕様の小さめの弁当箱、もうひとつは私が仕事の時に使っている普通サイズのもの。

智美さんから『二人分のお弁当をお願いできる？』と頼まれていたので、てっきり自分と啓介くんの分だと思っていた。

なので、子ども向けの手作り弁当のサイトを参考に人気のおかずを選んで作っている。おにぎりも、啓介くんが食べやすいように小さめに握ってラップに包んである。だけど啓介くんが食べているお弁当は、比嘉部長が課長に渡していたトートバッグの中に入っていたものだ。

もしかして、智美さんが言っていた『二人分』というのは私と課長の分だったのかもしれない。大人用が必要だったなら、それに合わせて作ってきたんだだけだな。

そういえば、課長はなにか食べ物を持ってきているんだろうか。見たところ、彼の荷物はレザーのスタイリッシュなボディーバッグだけで、お弁当の類が入っているようには見えない。

私は、思い切って聞くことにした。

「あの、小笠原課長は食べるものとか、持ってきてますか？」

「いや、部長からこつちで弁当は用意するから、手ぶらでいいと言われていたんだ」

その言葉を聞いて、私は完全にやらかしてしまったと頭を抱えた。

「実は、智美さんから二人分のお弁当を頼まれていたんですけど、てつきり啓介くんの分かなと思っていたんです。それが、どうやら私の勘違いだったみたいで……。あの、お子様向けなおかずが多いしお口に合うか分かりませんが、よかったら食べますか？」

おずおずと聞くと、課長は驚いて目を見開いた。

「木下さんが作った弁当？」

「はい。もし、よければですが」

「じゃあ、遠慮なくいただきますかな」

課長の声色は、ほんの少し申し訳なさそうだった。

「どうぞ。本当にお口に合うか保証はできませんけど」

何度も念押しして、自分用の弁当箱を課長に渡した。

彼はお弁当箱の蓋を静かに開けて「いただきます」と言い、割り箸でベーコンの野菜巻きを持ち上げて口に運ぶ。その姿を、少し緊張しながら見守った。

「美味しい」

課長がそう呟いた瞬間、心がふっと軽くなる。

「本当ですか？ よかった、お口に合って」

笑顔でそう返すと、課長は少し照れくさそうに言った。

「母親以外の手作り弁当を食べたのは初めてだ」

「そうなんですか？」

予想もしなかった言葉に驚きの声が出た。課長はモテそうだから、そういう経験は何度もあると思っていた。

「ああ、なかなかそういう機会に恵まれなかったから」

課長は真面目な表情で答える。その言葉は、にわかには信じられないけど。

「なんかすみません。こんなお子様用のお弁当で」

以前、料理教室に通ったことはあった。しかし、料理に絶対的な自信があるわけではないので、彼の初めての手作り弁当が私で申し訳なくなる。

「どうして謝るんだ？ すごく美味しいよ。この卵焼きも俺好みだし。ほうれん草が入っていて彩りも綺麗だよ」

卵焼きを箸で摘^{つま}んで持ち上げる。

「ありがとうございます」

面と向かって褒められて気恥^{かぢ}ずかしくなる。お世辞かも知れないけど、そんな風に言ってもらえて素直に嬉しい。いつもは前日の残りのおかずを適当に詰めたり、冷凍食品を利用したりしている。今日は啓介くん用だと思っていたこともあり、ちゃんと手作りしておいてよかったと心の底から

思う。

課長は黙々と弁当を食べ進めているので、私は「お茶を買ってきます」と声をかけて自動販売機に向かった。

小走りで戻つてくると、二人はお弁当を食べ終えていた。啓介くんは、おやつの棒付きのアメを嬉しそうに舐めている。

「お茶、どうぞ」

「ありがとう」

ペットボトルのお茶を渡して、私は残っていた小さなおにぎりを頬張った。

公園にはゆったりとした時間が流れていて、たまにはこんな休日もいいものだと感じる。ぼんやりしていると突然、緑色の物体が跳ねてきて私の足に飛び乗った。

「うわっ」

驚きで思わず大きな声が出る。

そして反射的に足を上げた瞬間、バランスを崩してしまった。

「大丈夫か？」

課長が倒れそうになった私の体を手で支えてくれた。バツタに驚いてひっくり返りそうになったなんて、恥ずかしすぎる。

「す、すみません」

「しのちゃん、どうしたの？」

私が慌てて体を起こすと、啓介くんが心配そうに聞いてくる。大人が突然、大きな声で叫んだら気になるよね。

「緑のバツタが足に飛んできたからビックリして、大きな声が出ちゃった」

「バツタ？」

今度は課長が口を開く。

「はい。バツタです。虫は見るのはギリギリ大丈夫なんですけど、触ったりするのはちょっと苦手で」

「それは災難だったな」

課長が苦笑いしながら言う。

「しのちゃん、バツタきらいなの？」

啓介くんがクリクリした目をして聞いてくる。苦手という言葉の意味は、三歳の子には難しいかもしれない。好きとか嫌いが分かるなら、怖いと言えば大丈夫そうかな。

「嫌いというか、ピョンピョン跳ねるのが怖いんだよね」

「しのちゃん、おとななのにバツタがこわいの？ ママはてでつかまえてくれるよ」

啓介くんはクスクス笑う。この答えは正解だったみたいだ。

それにしても、バツタを手で捕まえられるなんて智美さんはすごいな。私は、絶対に無理だ。

「まーくん、ボールであそぼ」

啓介くんがトートバッグをゴソゴソとあさり、手のひらサイズのボールを取り出す。

「よし、やろうか」

課長は立ち上がり、啓介くんの後を追いかけていく。そして、二人はボールを転がして遊び始めた。私はその姿を見ながら、なんだか不思議な気持ちになる。

あの無口で堅物だと噂される人が、笑顔で子どもとボール遊びするなんて信じられない。しかも、走っているなんてレアすぎる。博美がこの光景を見たら、発狂するんじゃないだろうか。スーツ姿しか見たことがなかったから、私服のラフなスニーカーとデニム姿にドキドキしてしまう。数時間一緒に過ごしてみて、改めて素敵な人だと思った。常に啓介くんのことを気にかけていて、彼が転びそうになった時はすぐに手を伸ばして支えていた。何気ない一瞬だったけど、課長の優しさや反射的な行動を見て、将来はきっといいお父さんになりそうだと思った。

それに、私が作ったお弁当を残さず食べてくれて『ごちそうさま、弁当ありがとう』と言ってくれた。その一言からも、気遣いや感謝の気持ちが伝わってきて嬉しくなる。

『お礼に今度、なにかご馳走する』と言われたけど、遠慮しておいた。そこまでしてもらうほどのことではないと思ったからだ。

それにしても、博美は課長に彼女はいないと断言していたけど、どうしても信じられない。

こんなに穏やかで気遣いができて、子どもに対しても優しく接することができる人なのだから、特別な人がいるはずだ。そう考えた瞬間、胸がチクリと痛んだ。

「しのちゃん、しゃしんとって」

不意に、ボールを手を持った啓介くんが、課長に抱っこされながら嬉しそうに叫ぶ。

そういえば、課長も比嘉部長に写真を撮るように頼まれていると言っていた。

だから、さっきも滑り台を滑っている啓介くんの写真を撮っていたっけ。

私はバッグからスマホを取り出す。カメラを起動してピントを合わせていると、画面越しに課長と目が合ったような気がした。写真を撮るんだから、こちらを見るのは当然のこと。

それなのに、変に意識してしまい動揺から手が震える。

「い、いくよ。はいチーズ」

どうにか気持ちを落ち着かせて、掛け声とともに画面をタップする。しかし、撮れた画像を見ると少しブレていた。

「すみません、ちょっとブレてしまったので、もう一度撮り直してもいいですか」

「いいよ。ほら、啓介も志乃ちゃんの持っているスマホを見て」

そう言って課長は私のスマホを指差した。

課長が私の名前を呼んだ瞬間、胸がドキッと高鳴る。つい、どうして名前を知っているんだろうと思ってしまうけど、比嘉夫妻や啓介くんが私のことを志乃ちゃんと呼んでいたからかと思直す。

ほんの一瞬の出来事だったのに、頭の中ではいろんな考えが駆け巡っていた。

「しのちゃん、まだ？」

啓介くんと呼ばれ、ハッとして私は慌ててスマホを構える。

「ごめん、今撮るね」

失敗しないように今度は連写した。これだけ撮れば一枚ぐらいはいい写真があるだろう。

「撮れたよ」

「みせてみせて」

課長の腕から下り、小走りで駆け寄ってくる啓介くんは、私は撮れた写真を見せてあげた。

「わあ、まーくんとなかよしだ」

「そうだな」

「しのちゃんもいつしよにとろう」

不意に啓介くんが笑顔で言った。

「私も？」

「うん。ぼくとまーくんとしのちゃんのさんになで」

そう言っつて小さい手を出し、指を三本立てる。

「木下さん、撮れる？」

「あ、はい」

啓介くんを挟み、私と課長のスリーショットで写真を撮ることになった。けれど日頃、自撮りなんてしないので、どういう感じで撮ればいいのか分からない。

とりあえず、腕を伸ばして三人が画面に収まるようにスマホを構える。そしてタイミングを見計らって画面をタップすると、少し斜めになったけどなんとかスリーショットの写真が撮れた。

思い切り遊び回った啓介くんは、休憩するためにレジャーシートに座ってお茶を飲む。

私はスマホで、さっき撮ったばかりの写真を見ていた。

「ぼくかっこいいでしょ」

「うん、すごくカッコいいよ」

啓介くんは戦隊ヒーローが好きなのか、同じようなポーズをして何枚も写っていた。

つい啓介くんのことを可愛いと言いたくなかったけど、かっこいいと言っつて正解だった。

スマホの画面をスライドすると、スリーショットの写真が現れる。それを見た啓介くんが、笑顔で言う。

「まーくん、しのちゃんかわいいね」

「そうだな」

「ぼく、しのちゃんだいすき。まーくんは？」

無邪気に話す啓介くんはギョツとした。三歳でそんなにおませなことを言うの？

一人焦っていると、課長の口から発せられた言葉に耳を疑う。

「俺も好きだよ」

「よかった」

二人の会話に、私は顔が真っ赤になっていた。啓介くんは話を合わせているだけだと分かっているけど、”好きだよ”なんてワードを課長が言うとは卒倒ものだ。

「しのちゃんもまーくんのこと好き？」

「えっ」

急に私の方にも飛び火して焦ってしまう。そんなことを聞かれても返事に困るよ、啓介くん！

「しのちゃんは、すきじゃないの？」

しょんぼりした表情で言われ、私は慌てて否定する。

「そんなことないよ」

「じゃあすき？」

「うん。す、好きだよ」

顔から火が出そうなぐらいの羞恥プレイだ。しかし、ふと視界に入った課長の顔も心なしか赤くなっているように見えた。

「ぼくもまーくんすき。みんなだいすきでなかよしだね」

満足そうに笑う啓介くんには、誰も勝てないだろう。

課長が腕時計を見て、時間を確認すると口を開く。

「啓介、そろそろ帰ろうか」

「えー、もうちよつとあそびたい」

「ダメだよ。ママからお昼寝するように言われているから」

「でもー」

口を尖らせ、帰りたくないアピールをする啓介くん。そんな顔も可愛いなと思ってしまう。

「じゃあ、アイスが食べられないけどいいのか？」

「えーアイス？ やだ、たべる」

「じゃあ、帰ろうか」

「うん」

アイスにつられ、啓介くんは素直に言うことを聞いてくれた。

課長の子どもへの接し方が、あまりにも自然で思わず感心してしまう。

「木下さん、ここ片付けてもらってもいい？」

「はい」

声をかけられ返事をする、そのまま課長は啓介くんを連れて手洗い場に向かう。

私はレジャーシートをバサバサと振って芝生や汚れを払い落とすと、綺麗にたたんでビニール袋にしまった。そして荷物をまとめると、啓介くんと一緒に課長の車に乗り込んだ。

「よく眠ってるなあ」

ソファの上でサヤと寝息を立てて寝ている啓介くんを見て、そっと呟く。

課長の住んでいるマンションは、公園から車で二十分ぐらいの場所にあった。

公園で遊んだあと、課長のマンションに行くことは比嘉部長たちと事前に決めていたらしい。

私は、自然とその流れについてきた感じだ。

遊び疲れたのか啓介くんは車の中でぐっすり寝てしまったので、課長が抱っこして部屋まで運び、リビングのカウチソファに寝かせた。

最初は寝室のベッドに寝かそうとしたけど、起きた時に誰もいなかったら不安になるかもしれないと考えて、リビングのソファにしたのだ。

そして今、どさくさに紛れて課長の部屋にいる状況にソワソワしている。

課長が住んでいるのは、十五階建てのマンションの十階。

玄関から真つ直ぐ伸びる廊下の奥にリビングがあり、途中にはいくつか部屋の扉が並んでいる。その中のひとつはバスルームと洗面所で、さつき手洗いうがいをさせてもらった。

リビングはすっきりとしていて、余計なものは置かれていない。

家具はモノトーンで揃えられていて、落ち着いた雰囲気だ。テーブルの上には、経済新聞が無造作に置かれている。私も当たり前のようにリビングに座っているけど、本当にいいのだろうか不安になってくる。

課長に彼女がいるかもしれない、という考えが頭をちらつく。啓介くんは上司の息子だからいいとして、無関係な私がこの部屋にいるのはまずい気がする。居ても立ってもいられなくて、聞いてみることにした。

「あの、私ってここにも大丈夫ですか？」

「どうのこと？」

課長は意味が分からないというように、首を傾げている。

「えっと、啓介くんはともかく、私なんか小笠原課長の部屋にすることを彼女さんが知ったら、いい気持ちはしないんじゃないかと思つて……」

戸惑いながら口にする、課長は穏やかな笑みを浮かべて言った。

「彼女はいないから、そんな心配はしなくてもいいよ」

「そうなんですネ」

その言葉に安堵している私がいいた。

「それより、木下さんは和菓子好きだね？」

急に話題が変わり、戸惑いながら答える。

「はい、好きですけど……」

「よかった。ちょっと待って」

課長は立ち上がってキッチンに向かった。どうしてそんなことを聞くのか不思議に思っていると戻ってきた課長がコーヒーと栗まんじゅうが載ったお皿をローテーブルにそっと置いた。

この栗まんじゅうは有名な和菓子屋『霜月堂』^{しもつきどう}のもので、数量限定で並ばないと手に入らないはずだ。

「本当は温かいお茶の方がいいかと思つたけど、うちにはないからコーヒーで我慢して」

「いえ、とんでもないです。ありがとうございます。小笠原課長は甘いもの、好きなんですか？」

「嫌いじゃないよ。この栗まんじゅうは、木下さんがうちに来ると思つて朝一で並んだんだ」

笑顔でそう言われ、その顔に思わずときめいてしまった。

私のために、わざわざ並んで買ってくれたってこと？

申し訳ないやら嬉しいやらで、なんとも言えない複雑な気持ちが胸の中に広がる。

「木下さんといえば、白玉あんみつだからね」

どうということだろう。意味が分からず首を傾げていたが、あることを思い出して大きな声を出し

てしまう。

「あっ！」

「シャッフルランチの時、デザート白玉だんごをテーブルに転がしたよね」

「覚えているんですか？」

「あれは、なかなかのインパクトがあったから忘れないよ」

クスクスと笑いながら言われ、その時の光景がよみがえり苦い表情になった。

あれは入社一年目の時のシャッフルランチ。

梨音ちゃんと再会したあの日、まだ「課長」になる前の小笠原課長も経理部から参加していた。当時、新入社員だった私は他の部署の人たちを前にとっても緊張していて、思わぬ失態を犯してしまったのだ。

食後のデザートとして出された白玉あんみつを食べようとした時、スプーンから白玉だんごが落ちてコロコロと転がった。しかも、それがよりもよって私の真正面に座っていた課長の方へ転がってしまった。

もしこれが友達同士の場合だったら、誰かが笑いながら『なにやってんの』『そのだんご、生きてるんじゃないの?』なんて突っ込んでくれたかもしれない。

でも、その場のほとんどが初対面の人たちだったので、みんな反応に困っていた。

しかも運悪く梨音ちゃんとは席が離れていて、助けを求めることもできなかった。

転がっただんごを拾おうと手を伸ばした時、課長が黙って目の前のだんごを紙ナプキンで包んで

拾ってくれた。

そして『俺は甘いものが苦手だから、君が食べてくれたら助かる』と言って、自分の白玉あんみつのお皿を私の前に置いてくれた……ってあれ?

おかしいな。私の記憶が間違っていないなら、あの時は『甘いものが苦手だ』と言っていたはず。それなのに、さっきは「嫌いじゃない」と言って栗まんじゅうを食べていた。

もしかして、あの時は私のことを気遣ってくれたのか。

実際、課長がフォローしてくれたおかげで場の空気が和んだので、その優しさに救われた。

口数が少ないだとか融通が利かない堅物だと博美は言っていたけど、やはりそんなことはないと思う。

プライベートと仕事は、きっちり分ける人なんだろう。

栗まんじゅうを食べながらチラチラと課長を見ていると、目が合った。その瞬間、まんじゅうが気管に入ってむせてしまう。

「んっ、ゴホッ……」

「大丈夫? ちょっと待ってて」

咳込む私を見て、課長は慌てた様子でキッチンに向かった。ペットボトルの蓋を開けてコップに水を注ぎ、急いで戻ってくる。

「これ飲める?」

水の入ったコップを渡してくれて、優しく背中をさすってくれる。私は水を飲んでようやく落ち

着いた。

「大丈夫？」

「はい、ありがとうございます。お騒がせしてすみません」

「いや、落ち着いてよかったよ」

ふと、課長との距離がとても近いことに気づく。それに、さっきは私の背中をさすってくれていた。課長の手が私の体に触れたことを思い出し、顔が真っ赤に染まる。

「木下さん、顔が赤いけど本当に大丈夫？」

「だ、大丈夫です」

恥ずかしくて、これはむせて赤くなっているわけではないので気にしないでくださいと言いたいくらいだ。

たった数時間、一緒に過ごしたただけなのに、課長は本当に優しい人だと実感する。

「そうだ、連絡先を教えてもらってもいい？」

「えっ」

突然の言葉にドキッとする。

「さっき撮った啓介の写真を送ってもらおうかと思って。俺の撮った写真と一緒にアルバムに保存して、まとめて部長に送りたいんだ」

なんだ、そういうことか。写真のことをすっかり忘れていた。

連絡先というワードに勝手にドキドキした自分が恥ずかしい。バッグからスマホを取り出し、連

絡先を交換する。そのまま、メッセージアプリで啓介くんの写真を送信した。

私のスマホの連絡先一覧に課長の名前が登録されているなんて、不思議な気持ちだ。

それをまじまじと眺めていると、ピコンと通知音が鳴り、目の前にいる課長から写真が送られてきた。

「これは……」

画面をタップすると、啓介くんと一緒に滑り台を滑っている時の写真と、私が大きな口を開けて笑っている二枚の写真があった。

「木下さん、いい笑顔で笑っていたから思わず撮ってみたんだ」

「こんな不細工な顔はちょっと……」

「全然不細工じゃないよ。すごく可愛い」

思わず肩が揺れる。啓介くんとのお話の中でも私のことを『可愛い』と言っていたけど、それは話を合わせていたからだと思っていた。じゃあ、今の言葉は？

スマホから顔を上げると、課長は真っ直ぐにこちらを見ていた。こんな風に見つめられるのは初めてで、胸がドキドキと高鳴る。

ピンポン——

突然、無機質なインターホンの音が鳴り、私はビクッと体を震わせた。

「部長たちだな」

課長はすぐに立ち上がり、モニターで来客の対応をしたあとに玄関に向かった。私はその背中を

見送りながら小さく息を吐く。課長に真っ直ぐに見つめられて胸がざわついた。あんな風にじっと見られるのは初めてで、どうしていいのかわからなくなる。

しばらくして、玄関の方から足音が聞こえてきた。

啓介くんが寝ていると聞かされた比嘉夫妻は、気を遣ってそつとリビングに入ってくる。

智美さんは柔らかく微笑みながら私を見た。

「志乃ちゃん、今日は本当にありがとう」

「とてもいいです。啓介くんと遊べてすごく楽しい一日でした」

「そう言ってもらえてよかったわ。啓介もよく寝ているわね」

智美さんは、リビングのカウチソファで寝ている啓介くんを見た。

「かれこれ一時間ぐらい寝てますよ。おやつのは食べ損ねてますけど」

「ふふ、遊び疲れたのね。啓介、わがまま言ったりしなかった？」

「全然言ってますよ。すごくいい子でした」

滑り台の無限ループはあったけど、子どもと触れ合える機会なんてめったにないので楽しかった。

「あつ、智美さん。お弁当のことなんですけど、私に二つ作ってと言いましたよね？」

「うん。それがどうしたの？」

智美さんはキョトンとした表情で私を見る。

「あれは、小笠原課長の分だったんですね」

「そうだけど。私、言ってなかったっけ？」

そんな話をされた記憶がない。ということとは、智美さんは私にちゃんと伝えたつもりだったんだろう。

「はい。だから、てつきり啓介くんの分かなと思っていたんです」

「あちゃー、ごめんね。言ったつもりでいたわ。困らなかった？」

「はい、大丈夫でした」

結果的に問題はなかったし、上手く対応できたのでよしとしよう。

「起こしてグズツたらうるさいから、このまま運ぶか」

「そうね」

比嘉部長が小声で智美さんに声をかける。そして、寝ている啓介くんをそつと抱き上げた。

「車まで荷物を運びますよ」

「悪いな、政宗」

課長はトートバッグを持って立ち上がると、玄関に向かう。私も三人を見送るために外へ出た。エレベーターを降りて駐車場まで歩いていると、智美さんに小声で話しかけられる。

「志乃ちゃん。今日一日、小笠原さんと一緒に過ごしてどうだった？」

なぜか、期待を込めた目で見つめてくる。

「えっ、あの……楽しかったです」

少し戸惑いながら答えると、智美さんは首を傾げた。

「それだけ？」

「それだけ、とは？」

聞き返すと、智美さんは眉を寄せながら尋ねてきた。

「ちょっと聞きたいんだけど、志乃ちゃんって小笠原さんのこと気になっているよね？」

「えっ」

思わず絶句した。誰にも話していないはずの、憧れというか、私の片想い。

秘めていた私の気持ちを言い当てられて困惑する。どうして智美さんが知っているんだろう。

すると、私が言葉にしなかった疑問に応えるように智美さんが言った。

「志乃ちゃんに経理部に行くようにお願いする時、いつも嬉しそうな顔をしているなと思っていたの。最初は同期の子がいるからかなと思ってはいたけど、ある時それは違うなと確信したわ」

智美さんが自信ありげな表情を浮かべる。

「伝票に不備があった時に小笠原さんが物流部に来たことがあったでしょ。その時、志乃ちゃんが恋する乙女みたいな表情で、小笠原さんの方を見ていたんだよね」

嘘でしょ……。そんなつもりはなかったのに。

私は一体、どんな表情を人前で晒していたんだろう。恥ずかしすぎて、穴があったら入りたい。

「あの、気になっているのは確かですけど、本当にそういうのじゃないので……」

「智美、行くぞ」

付き合いたいだとか、そんな大それたことは考えていないと必死に伝えようとしていると、先に車に乗り込んだ比嘉部長が不意に声をかけてきて、話はそこで中断した。

智美さんは「分かった」と言っただけで助手席へと足を進めた。

「二人とも、今日は本当に世話になった。おかげで智美とのデートを楽しめたよ」

「それはよかったです」

当初の目的が達成されて、ホッと胸を撫で下ろす。

「あとは若い二人で、晩飯でも食べに行ったらどうだ？」

比嘉部長が課長に向かって言う。二人って、それはハードルが高いです！

「そうですね。木下さんがよければ行こうと思っています」

てっきり課長は断ると思っていたので、まさかの肯定の返事に驚きを隠せない。

「そうか。志乃ちゃん、なにか美味しいものでも食わせてもらいなよ」

「二人とも、今日はお世話になりました。それじゃあ、また会社で」

智美さんがにこやかに手を振り、比嘉部長の車は走り出した。

行ってしまった。残された私はどうしたらいいんだろう。

本当にご飯を食べに行くのかな。チラリと視線を向けると、課長と目が合った。

「晩飯、どうする？」

「えっと……」

返答に困る。今日を逃すと課長と一緒に食事ができる機会は二度とないと思うけど、二人きりなんて緊張するに決まっている。返事に迷っていると、課長が口を開いた。

「実は比嘉部長から、今日のお礼ってことで食事代を預かっているんだ。さすがに食事に行きませ